

こども特派員が行く!!

このコーナーは、小・中学校の子どもたちが自分たちで編集・発行する「特派員」となり、有田市の良さを伝えてくれます。

今回のこども特派員は、初島中学校生徒会役員の(左から)山本照さん、南村椋太さん、武田伊央さん、橋本愛音さん、吉田さやかさんです。

※紙面の文章及び掲載の写真はこども特派員によるものです。



初中ソーラン

「初中ソーラン」は「南中ソーラン」をもとにして、昨年度の生徒会が中心となって作った全校生徒が参加する踊りです。みんなと交流ができ、初島中学校は活気にあふれています。

「初中ソーラン」は2・3年生が1年生に教え、その1年生が2年生に教えるという「先輩から後輩へ」伝えるようになっていきます。発足してからまだ2年ですが、今後初島中学校の伝統としていくために、今、一生懸命頑張っています。

「初中ソーラン」の良さを伝えてあげてほしいです。次に、私たちは「初中ソーラン」がなぜ生まれたのか疑問に思い、元生徒会役員の東山祐さん、久喜麻央さんにもお話を伺いました。

「初中ソーラン」が誕生したのは、その一年前に発足した「全校合奏」の取り組みがきっかけでした。全校生徒が一緒に演奏する「全校合奏」以外にも、初中だからこそ全員でできる新しい取り組みはないかと考え、できたのが「初中ソーラン」だそうです。

初中は規模が小さく、生徒数も年々減ってきています。だからこそ、後輩たちに自分たちでつくった伝統を残したい、という願いもあるそうです。そして現在、「初中ソーラン」は、たくさんの人に支えられ、学校や地域を元気にする取り組みとして日々進化し続けています。

広告



このコーナーは、地域の課題解決について研究している龍谷大学政策学部の学生の皆さんが取材しました。有田市でのフィールドワークなどでの活動を通じて感じた「縁側」の魅力を多くの人に伝えるため、学生自ら取材を行い、記事を書いています。今回は、東京から有田市に赴任された辻川和希さんにお話を伺いました。※ここでの「縁側」とは、「ホッとできる自分の居場所」という意味です。



辻川 和希 さん

龍谷大学がある京都府には特有の底冷えの寒さがあるが、私たちが訪れた日の有田市も暖冬とはいえず冷たい風が吹く寒い日であった。そんな中、今回お話を聞かせていただいたのは有田市役所の辻川和希さんである。とても気さくな方で終始楽しくインタビューさせていただいた。



なごやかな雰囲気での取材

福井県で育ち、大学進学とともに上京。そのまま東京で就職された辻川さんは、2年前に有田市へ赴任することとなった。このまちに住み始めた当初は、東京に比べ電車の本数が少なく、なにより方言が難しいと感じていた。しかし、以前より交通機関に頼らず車に乗ることが増え、苦手だった運転が上手くなったと嬉しそうに教えてくれた。

仕事柄、ずっとこのまにに残ることが出来ないが、色々な感情を共有した。

まちと、ひとと繋がる。

龍谷大学がある京都府には特有の底冷えの寒さがあるが、私たちが訪れた日の有田市も暖冬とはいえず冷たい風が吹く寒い日であった。そんな中、今回お話を聞かせていただいたのは有田市役所の辻川和希さんである。とても気さくな方で終始楽しくインタビューさせていただいた。

そんな辻川さんの憩いの場所は初島町にある「初島庭球場」である。この場所に出会ったのは有田市に来ておおよそ3ヶ月が経った頃に開催された市のスポーツイベントである。大学時代にテニスをしてきた経験もあり、職場の方と仕事終わりに行くようになった。仕事仲間以外にも、イベントで出会った人やテニス協会の方など、たくさんの人と繋がることが出来る場所となっている。また、スポーツをすることで仕事の気分転換にもなるため、とても大切な時間になっているそうだ。



たくさんの人と出会ったテニスコート

取材を終えて・・・ 今回の取材を含め、私たちは10回ほど有田市に足を運んできました。有田市の表情はいつも穏やかで、今までに四季折々の魅力をたくさん感じてきました。冬の有田市は初めてでしたが、今回も新たな魅力を教わりました。縁側としてご紹介いただいたテニスコートでのエピソード以外にも、たくさんさんの思い出話をお伺いし、辻川さんの有田市への熱い思い、赴任してからの2年間で築き上げられた有田市の方々の繋がりを知ることが出来ました。インタビュー後は、おすすめの食事を紹介していただいたうえに、寒い中、数十分並んでアツアツのラーメンと一緒に頂きました。最初から最後まで辻川さんの人柄に惹かれた私たちでした。



左から 猪尾雪乃、良元雪華、佐々木悠菜、村田新菜

広告

